

白山への道と 信仰

コイヅルハ中宮奥加賀

白山
前山
馬場

白山

西寄ノ南ニ
當ル

〈平成 29 年度 夏季展〉
7月11日(火)
～9月10日(日)

地黄煎
町端

はじめに

加賀・越前・美濃国にまたがる白山は、養老元年(717)、秦澄によって開山されたと伝わります。それ以降、山岳信仰の聖地として人々に仰がれ、白山山頂を目指す道は、禅定道と呼ばれました。特に三カ国の中で最も距離が長い加賀禅定道は、鶴来の白山本宮(白山比咩神社)を起点とし、手取川を遡って尾添に至り、それより尾根を歩いて山頂へ達する道のりです。

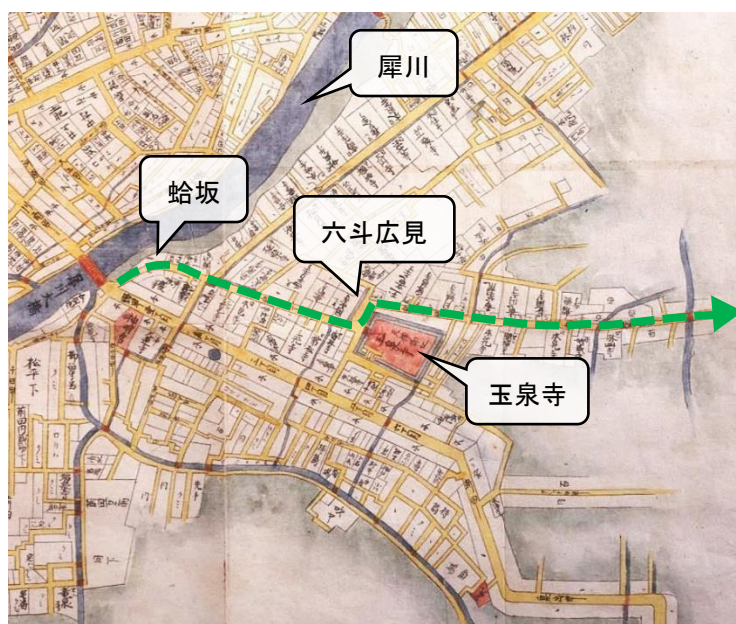
江戸時代に至っては、藩主前田家の人々により、白山の再興と外護がなされ、白山本宮や山頂への道は、参詣する人々の往来で賑いました。

本展では、当館所蔵の古文書や絵図をとおして、白山参詣の道筋や信仰の一端を紹介し、今年で開山1300年を迎える白山について、少しでも関心を持っていただければ幸いです。

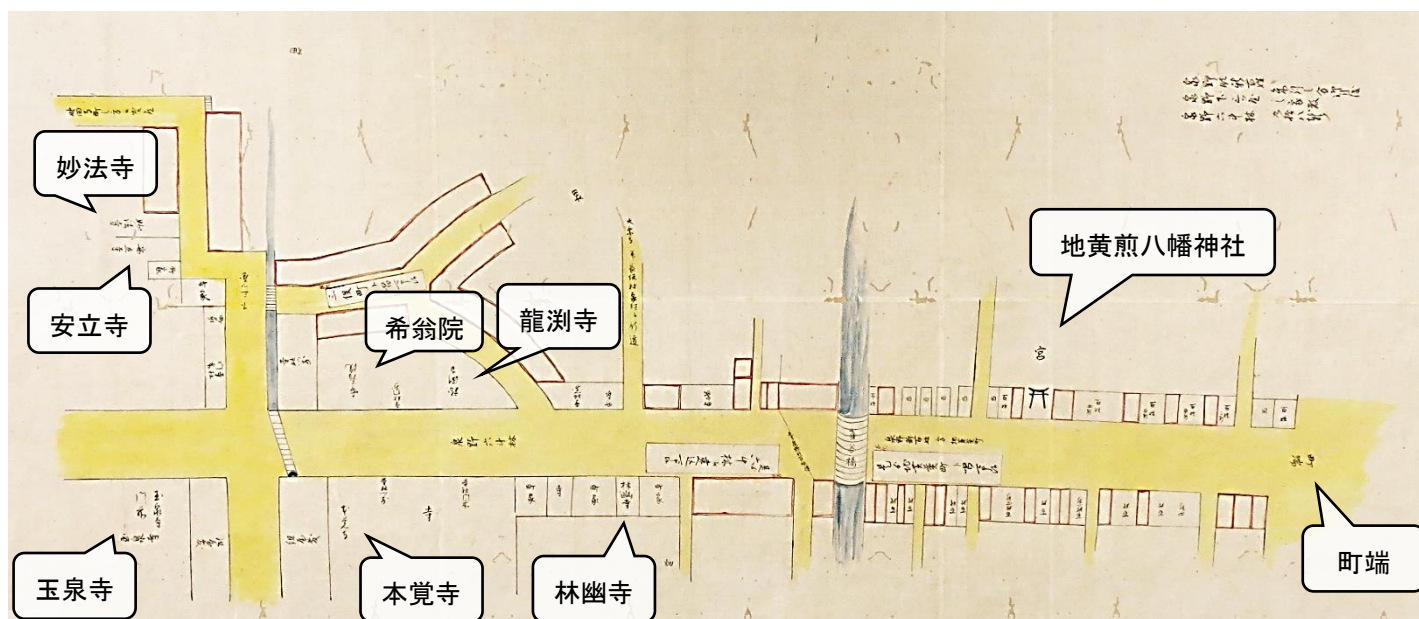
金沢から白山への道「鶴来街道」

江戸時代、金沢から白山へ目指す人々は、犀川を越え、北国街道と分岐する鶴来街道を歩みはじめます。鶴来街道は、「鶴来道」、「鶴来往来」、「鶴来往還」とも呼ばれ、その経路は、蛤坂を上り、寺町を經由して六斗の広見へ、城下町端にあたる泉野・地黄煎、そして高尾、額谷、四十万、坂尻、小柳などを通り、鶴来に至ります。

鶴来街道は、「三州測量図籍」(史料3)では、鶴来駅より金沢町端まで道程2里31町42間(約11.3km)、金沢町(城下町)までは、14町2間(約1.5km)とあり、これを合わせると、全長3里9町44間(約12.8km)の街道となります。



「金府大絵図」部分(大1005)



(史料1) 町続御郡地御引請之ヶ所家建等仮絵図(090-1034-52)

本絵図は、三俣町、六斗林、地黄煎町の鶴来街道筋を描いたものです。街道沿いには寺社が建ち並び、絵図右は「町端」と記されています。鳥居が描かれている場所は地黄煎八幡神社で、その参道は、現在の金沢市立泉野図書館駐車場北側に隣接しています。

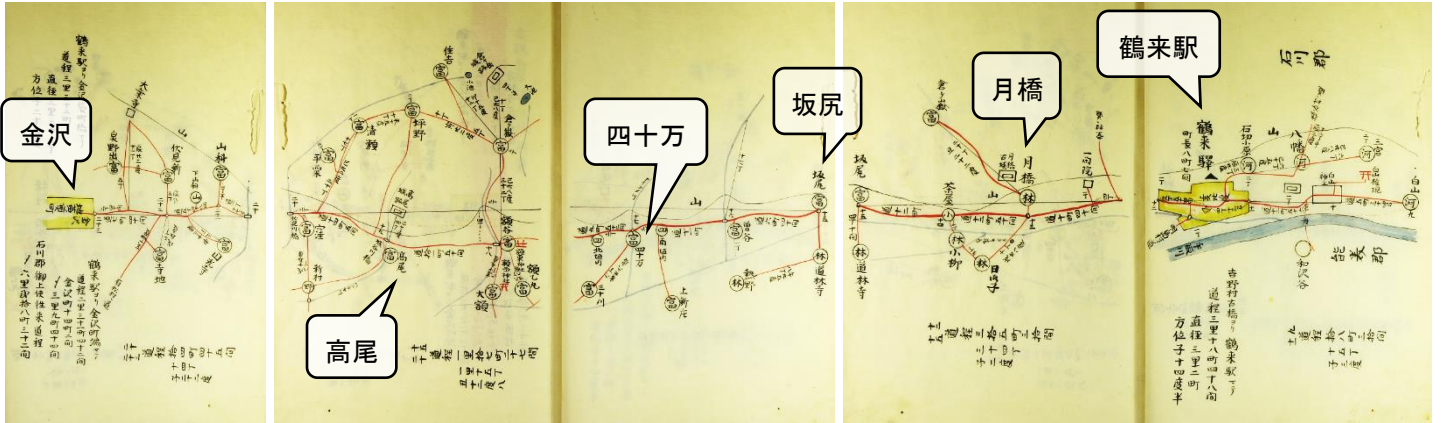
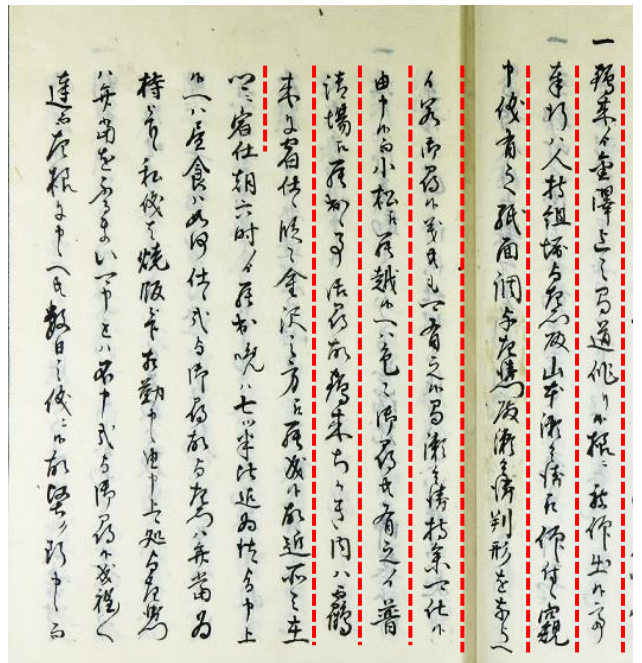
(史料2) 「微妙公夜話録(写)」

部分(096.0-59ア)

鶴来街道は、藩主前田利常の命により、明暦から寛文年間(1655～1673)頃に整備されました。

街道整備の奉行には、人持組の堀与左衛門(秀道)と山本瀬兵衛(長重)が任命され、鶴来側から工事が始められました。

一、鶴来方金沢迄之間道作り候様二被仰出候事、奉行八人持組堀与左衛門殿、山本瀬兵衛被仰付候、窺申儀有之紙面調、与左衛門殿、瀬兵衛判形をならへ候、若御尋候義共可有之候間、瀬兵衛持参可仕候由申候而、小松江罷越候へハ、色々御尋共有之候、普請場江罷出候事御尋故、鶴来ちかき内ハ鶴来に宿仕候、段々金沢の方江罷成候故、近所之在郷二宿仕、(後略)



(史料3) 「三州測量図籍」部分(16.20-118-3)

金沢地黄煎町から鶴来駅までの道筋のほか、道筋の寺社や古城、茶屋なども記されています。また、鶴来街道は、幕府の御上使(巡見上使)が巡見する経路と重なり、「御上使往来」とも呼ばれ、その道程は、石川郡において6里28町32間とあります。



道標「右 つるぎ道」
(現在の蛤坂交差点付近)



六斗の広見 (現在)



地黄煎八幡神社の文久4年(1864)銘の常夜灯

矢田四如軒の吉野十景めぐり

(史料4)「吉野郷領十景記行」部分(16.9 3-39)

矢田四如軒は、前田土佐守家の家老役として仕えた武人画家です。寛政4年(1792)の夏、四如軒は吉野十景を訪ね、「吉野郷領十景記行」を著しました。吉野十景とは、高月池・雲竜山・仙雲峯・太白山・鉢頭峯・白布瀑・飛竜岸・月影沢・虎狼山・高門橋を指し、村内の景勝を選んだもので、江戸時代、多くの人々が訪れました。

四如軒が歩いた道のりは、鶴来街道と重なり、街道沿いの風景が描写されています。(史料4～6)は同内容の写しで、(史料6)は、富田平七(雨村)の妻が弘化3年(1846)に描いたものです。



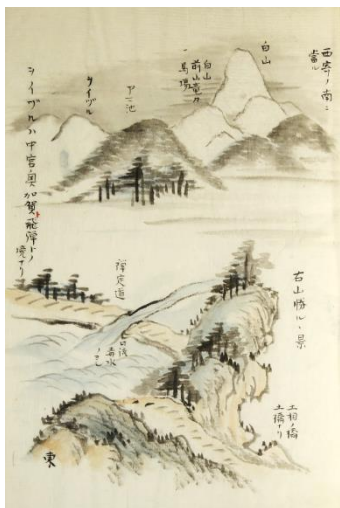
「鶴来 神主町」の頁



「手たたきの清水」の頁



「地黄煎 町端」の頁



「吉野谷村」の頁



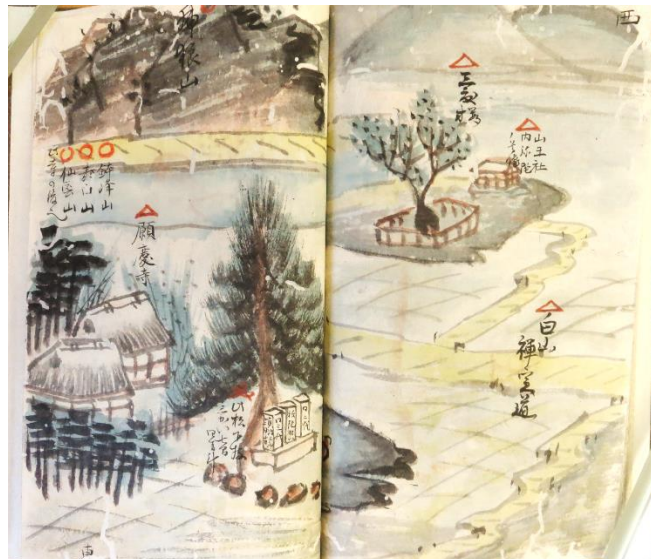
手叩き清水

手叩き清水の位置は、北陸鉄道石川線日御子駅の西側線路沿いにあり、観音堂が祀られています。

伝承では、泰澄がこの地を訪れた際、錫杖を立てて清水を開掘し、「この清水は白山の恵みの霊泉で、飲めば難病が治癒する」と言い残したとされます。江戸時代には、多くの人々で賑いました。



(史料5)「吉野十景巡見記」高門橋の頁(090-253)



(史料6)「吉野名所記」虎狼山の頁(23.2-55)

藩主前田家の白山参詣

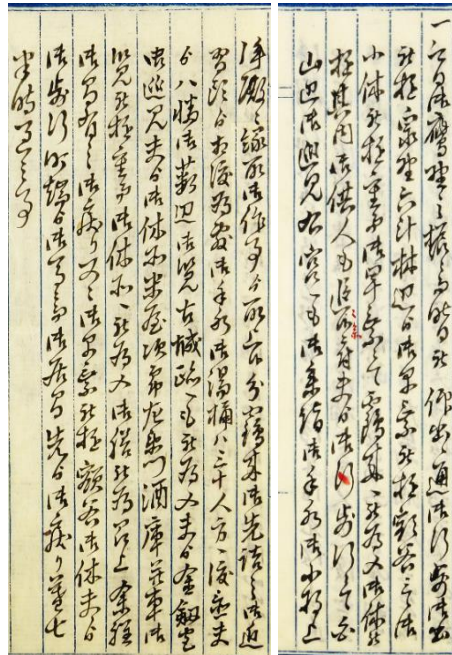
白山(現・白山比咩神社)への参詣は、金沢城下の町人たちの間でも行楽を兼ねて楽しまれましたが、藩主の前田家やその家族たちにおいても、しばしば白山への参詣が見られます。

(史料7・8)によれば、天保9年(1838)閏4月23日、藩主前田斉泰は、鷹狩の出立で、御供の者と白山参詣に出掛けました。地黄煎中程より額谷へ向かい、六郎兵衛方で小休、白山社を参詣して周辺にある八幡御藪(藩の御林カ)、古城跡(船岡山)、金劔宮を巡ります。そして、鶴来の町方役人米屋治郎左衛門方で休憩し、酒蔵・水車を見学しています。

(史料9)では、前田斉泰の妻溶姫の参詣の様子が記されています。この時は、四十万善性寺で小休止、鶴来の白山社へ行き宝物を御覧になったとあります。宝物の拝観の際は、拝殿と御本社(本殿)の間に仮の廊下を作り、幕を張って簀圍いし警固したとあります。

(史料8)「文政天保間諸事要用雑記」
天保9年閏4月23日条 (16.42-30)

一、今日御鷹野之振二而、昨日被仰出候通、御行歩御出被遊、泉野六斗林辺方御早乗被遊、額谷二て御小休被遊、重而御早乗二て鶴来へ被為入、御休被遊、其内御供人も追々参候二付、夫方御步行二て白山辺御巡見、右宮へも御参詣、御手水御小將上、拝殿二縁取御作事方取上候分、鶴来御先詰之御近習頭方相渡為敷、御手水御湯涌八三十人方へ渡置、夫方八幡御藪辺御覧、古城跡へも被為入、夫方金劔宮御巡見、夫方御休所米屋次郎左衛門酒庫并車御覧被遊、重而御休所へ被為入、御膳被為召上、余程御間有之御戻り、又々御早乗被遊、額谷御休、夫方御步行、町端方御馬二而御居間先方御戻り、暮七半時過之事、

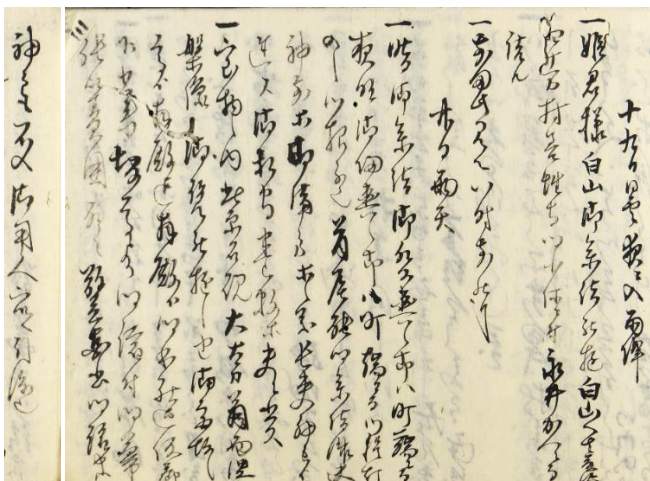


(史料7)

「成瀬正敦日記」天保9年閏4月23日条
(16.42-29)

一、昨日之御供揃二而六ツ半時過御出、地黄煎町中程へ被為入、五ツ半頃か、夫二付、何れも町端より御供之人々馬上仕、御馬沓も被為遊、額谷迄御早乗二付、御先へ入江半蔵高田善右衛門・加藤三郎左衛門、御供もの也、御跡へ主税・小左衛門・隼人・肴次郎・伴大夫・庄田牛之助・渡辺又作、馬上二而御供仕候、額谷村六郎兵衛方二而御小休、夫より鶴来迄御早乗、御宿米屋治郎左衛門方へ被為入、暫御休、御步行二而白山御参詣、八幡御藪・古城跡・金劔宮御巡見、米屋方水車・酒蔵御覧被遊、又治郎左衛門方へ被為入、御昼休、夫より六郎兵衛方迄御早乗、御休、町端迄御步行、尤町端迄御供何れも仕候、夫方御馬上二而七ツ半時過御帰殿被遊候事、

(史料9)「寺社方御用日記」
元治元年3月19・20日条 (16.61-19)



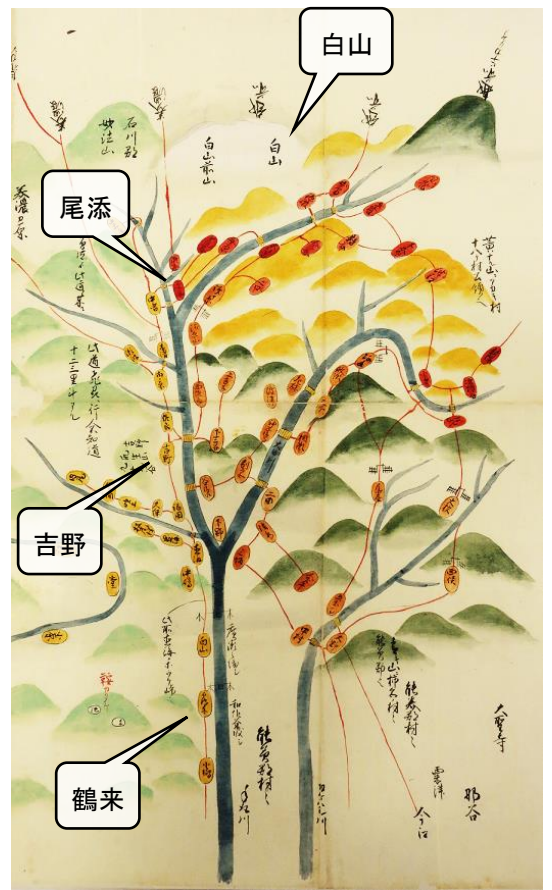
十九日曇夜二入雨降
一、姫君様白山御参詣被遊、白山へ者藤沢、四十万村善性寺御小休二付、永井加入二而詰ル、
(中略)
廿日雨天
一、昨日御参詣御発輿之節八町端二而夜明、御帰輿之節八町端二而御提灯入し御様子也、首尾能御参詣濟、夫々神前等御備方等之義、長吏・神主方達又、御札守・巻数等、夫々出入、
一、宝物之内紫石硯・大太刀・翁面・涅槃像御覧被遊之由、御宮坂之高方拝殿迄、拝殿方御本社迄仮廊下出来、坂高方御縮付、御幕張・簀圍所々警固出、御縮中八、神主も不入、御用人衆へ引渡也、

白山山頂への道「加賀禅定道」

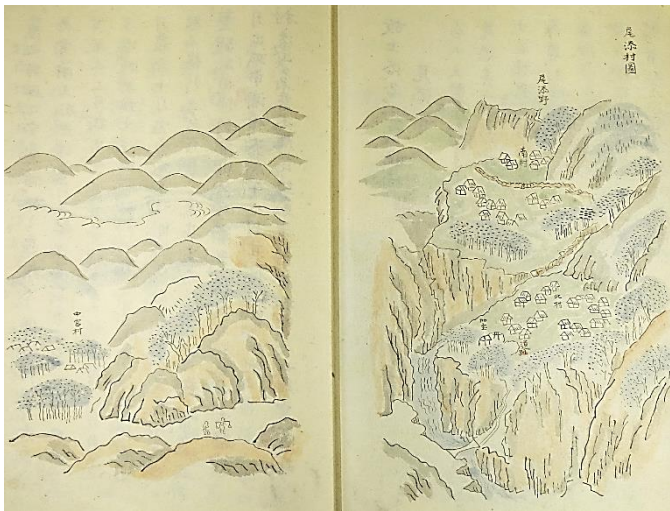
鶴来の白山比咩神社を起点として、白山山頂へ目指す加賀禅定道は、約 60 km に及ぶ道のりです。(史料 10)では、鶴来から、白山村、中島村、直海村、福岡村、吉野村、佐良村、市原村、木滑村、中宮村、尾添村へと続いています。

この道中の様子を描写したものには、鶴来町出身の儒者であった金子有斐(鶴村、1758-1840)が著した「白山史」、
「白山史図解」や幕府献上となった「白山遊覧図記」があります。(史料 11~13) はそれらの類本や写本となります。

(史料 11)は、鶴来から始まり、木滑村、尾添村、日神宮、つぼの水、龍場調場、緑碧池、千歳谷、朝暎洞など登山道筋の景観が描かれた明治 17 年(1884)の写し、(史料 12・13)は白山麓の溪谷や滝などの景勝地も描かれています。



(史料 10) 「能美・石川・河北山川絵図」
部分 (大 1091)



「尾添村図」の頁

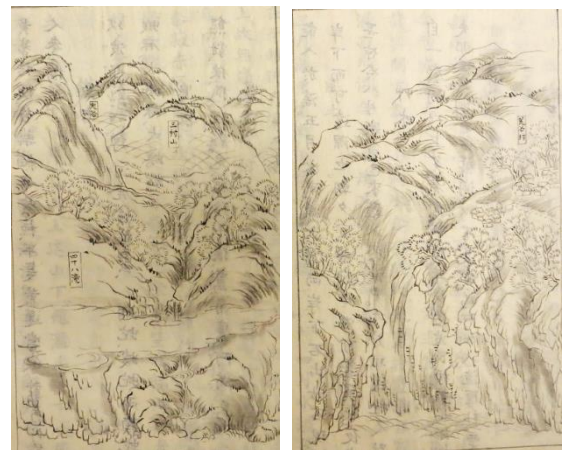


(史料 12) 「白山遊覧図記」龍頭山の頁
(16. 93-26)



「つぼの水」の頁

(史料 11) 「白山史図解譜」部分(16. 93-27)



(史料 13) 「白山史」
荒谷村・四十八滝の頁 (16. 84-48)



(史料 14)「加賀国白嶺之図」(大 1085)

本図は安永 2 年(1773)に作成されたもので、白山の大景観を取り入れた風景画的な曼荼羅図です。内容は、加賀禅定道を描き、登山道中には白地の短冊形に地名や建物の名称が記されています。絵図右側には、左から大汝(御内陣)、大御前、別山の三峰を描き、雲上の阿弥陀三尊が大御前を目指しています。その前方には、朱色の朝日が上り、そこから放つ光は、泰澄が座禅したとされる大御前峰の朝日洞を照らしています。大汝峰の左方には劔の嶽、明法峰(妙法山)を配します。

絵図下部は尾添川が左から右へ流れ、中宮村を起点としているのが分かります。

但檜ノ新宮ニ有クハ小仏像九体
一 半鐘 三ツ
一 鉦鼓 三ツ
右ノ殿ト小仏像ヲ取調ル如新ノ意也
明治七年七月 同副邑長 池田正吉
庶務課 中 駒井隆八

一 勢至菩薩像 一 件
但別山ニ安置有ク鋼像目形凡二十
一 六通ノ地藏像 一 件
但御前ト奥院トノ間ニ安置有ク
鋼像十目形凡四十共目余
一 泰澄木像 一 件
但室ニ安置有ク
一 阿弥陀佛像 一 件
但御前室ニ安置有ク鋼像目形七八
黄目斗
一 金佛木仏 二 件
但檜ノ宿社ニ有ク
一 観音鋼像 一 件
一 地藏鋼像 一 件
一 十一面観音木像 一 件
一 阿弥陀木像 一 件
一 修行者陶器像 一 件

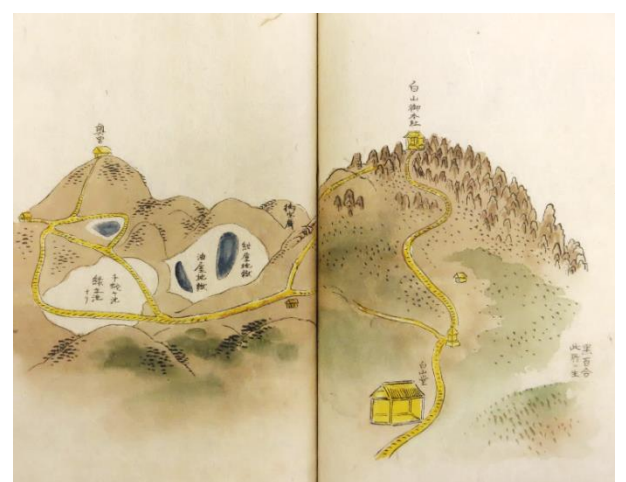
一 土面観音像 一 件
但白山御前ニ安置有ク鋼像目形
凡七拾貫目余并ニ阿弥陀鋼像
目形凡七八貫目斗
一 阿弥陀如来像 一 件
但奥院ニ安置有ク鋼像目形凡
四十貫目斗

明治期の神仏分離に伴って行われた同 6・7 年の白山山頂からの仏体下山の目録。

目録には、十一面観音像をはじめ、各仏像の所在地も記されています。

(史料 15)「白山復古記」下山仏目録 (16. 20-116)

白山山頂ニ在リテ夜半時色
一 阿弥陀木像 一 件
一 観音鋼像 一 件
一 地藏鋼像 一 件
一 十一面観音木像 一 件
一 阿弥陀木像 一 件
一 修行者陶器像 一 件
一 勢至菩薩像 一 件
一 六通ノ地藏像 一 件
一 金佛木仏 二 件
一 阿弥陀佛像 一 件
一 観音鋼像 一 件
一 地藏鋼像 一 件
一 十一面観音木像 一 件
一 阿弥陀木像 一 件
一 修行者陶器像 一 件
一 勢至菩薩像 一 件
一 六通ノ地藏像 一 件
一 金佛木仏 二 件
一 阿弥陀佛像 一 件
一 観音鋼像 一 件
一 地藏鋼像 一 件
一 十一面観音木像 一 件
一 阿弥陀木像 一 件
一 修行者陶器像 一 件



(史料 17)「白山草木志」部分 (K 4-38)

(史料 16)「白山禅定之日記」部分

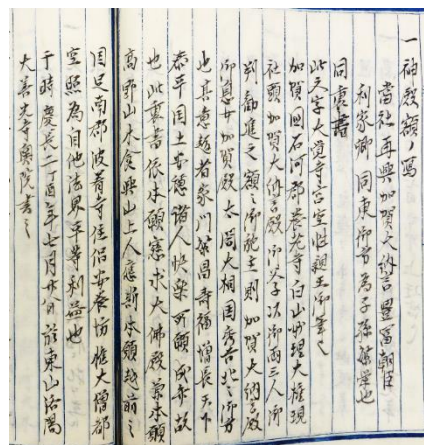
(23. 2-51)

嘉永 3 年(1850)、金沢の俳人富田平七(雨邨)が記した白山登山の日記。雨邨は、6 月 16 日に出発し、鶴来・女原・市ノ瀬(湯)で各一泊し、19 日登山しています。

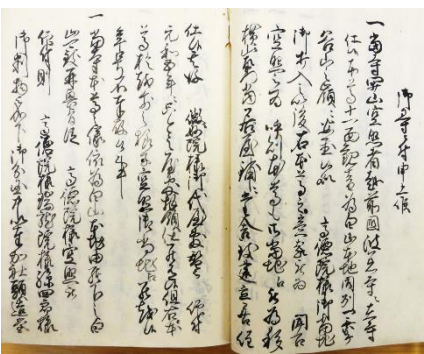
本書は、紀州和歌山藩士である畔田伴存が著したもので、白山登頂は安政 2 年(1855)頃とされています。本館所蔵のものは上・下 2 冊からなり、上は草部・虫部・魚部・鳥部・土部などについて、下は越前国から白山への道を記した紀行文を記しています。

藩主前田家の白山再興

戦国期の政治的混乱の中、白山諸社の多くが退転し、白山太神宮(現白山比咩神社)も荒廃しました。天皇から社頭再興の許可を得た白山の惣長吏(白山寺方の最高位)は、前田利家に、その外護を働きかけ、前田家から幾度の奉加を得ることができました。その後、慶長元年(1596)8月27日には、白山の社頭が再興され、歴代藩主やその家族、家臣たちの援助のもと、発展しました。



(史料 18)「白山諸社雑事記」
 神殿額ノ写の頁 (16. 61-84)
 慶長元年、白山太神宮の本殿・荒御前社・御供所前殿が再興され、翌2年7月には豊臣秀吉の側室となっていた利家三女の加賀殿(麻阿)が再建に尽力した父母(利家・まつ)の功績を称え、その子孫繁栄を記念する旨を刻んだ扁額が、奉納されました。



その裏書写しによると、安養坊空照(波着寺)が高野山の木食上人応其を介して、後陽成天皇の弟で京都嵯峨大覚寺門跡の空性法親王に揮毫してもらったことが分かります。

(史料 20)「寺社由来」波着寺の頁 (16. 61-425)

波着寺は、元、越前国に所在し、前田利家の越前国府中在任時代の祈禱所でした。のち住僧の空照は、利家の招きで加賀に移り、白山や石動山の再興に尽力しました。

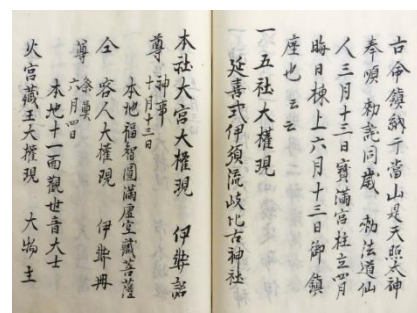


(史料 23)「加越物産図会」白山・立山雷鳥之図 部分 (16. 70-53①)

藩主綱紀が正徳年中に穿鑿し、画工に描かせたもの。



(史料 21)「郷土諸社寺絵図」
 加州那谷寺山景之図附加賀国那谷寺略縁起 (13. 0-68②)



(史料 22)「松雲公採集遺編類纂」神社部 石動山縁起 (16. 03-1⑬)



(史料 24)「白山雷鳥 鎮火符」(090-1216-3-4)

白山雷鳥の信仰

雷鳥は、白山や立山、飛騨高原に生息し、古くから人々に知られていました。白山では二千羽以上に生息し、現在では希少な存在となっています。

また、天に最も近い鳥とされ、雷が鳴ると、すぐ鳴き、その羽は雷を避けるという民間信仰が生まれ、さらに、鎮火信仰へと発展しました。

商家では、金沢の俳人・画人であった小松砂丘(明治 29年~昭和 50)が作った鎮火符(史料 24)を貼り、火事から家を守る火除けの札として利用されました。

※本パンフレットと展示史料は、異なる場合があります。